



中学校・高等学校の英語教員 / 国語教員のための

英語学習を通して知る日本語のツボ



英語を学びながら日本語を学ぼう！

英語から日本語を見ることで日本語の理解を深めよう！

日本語の発想で英語を使うとき気をつける点を知ろう！



日本語の「～ている」は進行形とは限らない！

日本語にも不規則動詞がある！

英語と古典にも共通点がある！



兵庫教育大学 菅井研究室編

目 次

はじめに.....	1
1. 品詞の対応.....	2
2. 文法用語の対応.....	5
3. 日本語の「～している」と英語の進行形.....	6
4. 不規則動詞も特徴を知ると納得できる.....	9
5. 日本語の「が」や「は」はすべてが主語ではない.....	11
6. 英語の助動詞と日本語の助動詞.....	13
7. 複文の順序.....	15
8. 日本語には受動文が2種類ある.....	17
9. 一人称代名詞の特殊な用法.....	20
10. 英語と古典(その1)——仮定法と反実仮想.....	21
11. 英語と古典(その2)——母音の音声変化.....	23
12. 動詞の「重さ」の違い.....	26
おわりに.....	29

はじめに

英語(外国語)を学ぶことのメリットとして、「英語を学ぶことで日本が見えるようになる」などといわれますが、英語を通して日本語を知るには、英語の教員に日本語に関する知識がなければなりません。この冊子は、英語と日本語を相対化し両者を複眼的に理解できるよう、日本語(国文法)に関する知識を英語科教員に提供するために作成されたものです。内容的には、英語の文法現象に関する12の事項を取り上げ、それに関連する日本語文法の知識や情報を加えて、対照分析的な解説を加える形になっています。この冊子が英語の先生方に期待しているのは次の3点です。

- ・ 英語の授業で文法を指導するとき、関連する日本語文法の要点を英語の先生方に提供すること。
- ・ 英文法と関連する日本語文法の要点を補足的に指導することで、英語と日本語(国語)に関する生徒の相対的な視野と理解を育むこと。
- ・ 英語と国語の異同を理解することで、日本語の発想から英語を表現するときに気をつけるべき指針を生徒に示すこと。

こうした見地から取り上げた12のトピックには、中学から高校までさまざまなレベルの内容が含まれていますが、大雑把に言えば、前半の6つが中学生向け、後半の6つが高校生向けのつもりです。現実には、学校やクラス単位で生徒の事情は一樣でないでしょうから、実際の生徒の理解力や教員の関心に応じて、柔軟にご利用いただければと思っています。難しいと感じられる内容は、パスしていただいて構いません。

なお、本冊子の発行は、財団法人博報児童教育振興会 2009年度第4回〈ことばと教育〉研究助成事業「英語教員のための日本語文法のメタ知識」(助成番号09-B-004)による成果の一部であります。

兵庫教育大学 菅井三実

1

品詞の対応

国語科(学校文法)では10の品詞が設定されており、英語科(学校文法)では8の品詞が設定されています。同じ形容詞でも、日本語と英語では使い方に違いがあります。

日本語の品詞については、数え方にいくつかの考え方があり、必ずしも一定ではありませんが、学校文法では10の品詞が設定されています。

名詞	形容詞	形容動詞	連体詞	副詞
動詞	接続詞	感動詞	助詞	助動詞

国語は10個！

このうち、形容動詞・連体詞・助詞・助動詞の4つは日本語に特徴的な品詞で、英語にはありません(助動詞は英語では1つの品詞として設定されていないのです)。

一方、英語の品詞についても、いくつかの考え方がありますが、次の8の品詞を設定するのが最も一般的です。

名詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞
前置詞	接続詞	間投詞		

英語は8個！

このうち、英語に特徴的なのは、代名詞・前置詞・間投詞です。国文法には代名詞という品詞はなく、名詞の中に代名詞が含まれる形になっていますが、英語では代名詞が名詞から独立して1つの品詞になっています。前置詞は、日本語の格助詞に相当しますが、英語では前置詞という名称で1つの品詞として設定されているところに特徴があります。気をつけたいのは、英語の間投詞と日本語の感動詞です。英語の間投詞と日本語の感動詞は、本当は同じものなのですが、それぞれの学校文法で別の名前が付いていますので「英語では間投詞」「日本語では感動詞」と覚えるしかありません。もし、英語の時間に「感動詞」と答えたり、国語の時間に「間投詞」と答える生徒がいたといたら、それは勉強していないのではなく、ただ整理できていないだけのことです。ですから、どうか英語の先生あるいは国語の先生の指導によって、知識を整理してあげて欲しいと望むばかりです。英語の品詞一覧にない品詞として注意したいのは、英文法には助動詞が品詞として設定されていないことです。英語の助動詞は動詞の中に含まれるものとして扱われています。また、冠詞も英文法では品詞としては設定され

ていません。

こうした共通点と相違点は、次の表のように整理できます。

	国文法	英文法
共通する品詞	名詞 形容詞 副詞 動詞 接続詞 感動詞[国語] / 間投詞[英語]	
異なる品詞	形容動詞 連体詞 助詞 助動詞	前置詞 (冠詞) (助動詞)



名前が違うぞ！

ここで、再び助動詞について触れておきたいと思います。国文法(学校文法)では助動詞が1つの品詞として設定されていますが、英文法では独立した品詞として扱われていません。このことが問題と思われるのは、英文法で1つの品詞として設定されていない英語の助動詞が、文の中で独立した成分となって「動詞を助ける」という助動詞らしい機能を果たしているように見えるのに対し、日本語の助動詞は、1つの品詞として設定されているのに、実際には動詞に付着する接尾語のように見えるからです。独立した品詞として設定されていない英語の助動詞の方が独立性が高く、独立した品詞として設定されている日本語の助動詞の方が依存性が高いというところに整合性の欠如があり、こうしたところは改善していかなければならないと思われます。

日本語と英語で対応がやや複雑なのが、日本語の形容詞・形容動詞・連体詞・副詞です。実際、英語の形容詞や副詞は、すべて日本語の形容詞や副詞に相当するとは限りません。英語の形容詞や副詞には、日本語の形容詞・形容動詞・連体詞・副詞が対応すると考えてください。では、次の表で、日本語の「大きい」「大きな」「幸せな」「幸せに」「高く」の品詞を考えてみてください。A～Eには、どんな品詞名が入るでしょうか。

	英語	日本語
big(大きい)の品詞は	形容詞	A
big(大きな)の品詞は	形容詞	B
happy(幸せな)の品詞は	形容詞	C
happily(幸せに)の品詞は	副詞	D
highly(高く)の品詞は	副詞	E

答えは、A (大きい) = 形容詞、B (大きな) = 連体詞、C (幸せな) = 形容動詞、D (幸せに) = 形容動詞(の連用形)、E (高く) = 形容詞(の連用形)となります。英語の big は形容詞ですが、日本語の「大きい」は形容詞で、「大きな」は連体詞です。連体詞というのは、①名詞を修飾することしかできず、②活用(語形変化)がない、という2つの特徴をもつ品詞です。この点で、連体詞は、英語の冠詞に似ています。また、英語の happy は形容詞ですが、日本語の「幸せな」は形容動詞です。ここで、英語の教員が戸惑うかも知れないと思うのは、動詞を修飾する語の品詞ではないでしょうか。英語の happily は副詞ですが、日本語の「幸せに」という語は、副詞ではなく形容動詞ですし、英語の highly は副詞ですが、日本語の「高く」という語は形容詞です。日本語の「幸せに」や「高く」は、それぞれ「幸せな」や「高い」の連用形という形であって、活用形が変わっても品詞が変わることはありません。言い換えると、英語では happy と happily では別の語なのに、日本語の「幸せな」と「幸せに」は同じ語が活用変化しただけで、形容動詞であることに変わりはなく、同様に、「高い」と「高く」も形容詞であることに変わりはありません。

あらためて、修飾関係という観点から言うと、英語でも日本語でも名詞を修飾するのは形容詞ですが、英語で動詞を修飾するのは副詞なのに対し、日本語では形容詞や形容動詞が(連用形という形になることで)動詞を修飾できるのです。



形容詞が動詞を修飾する！

動詞修飾において、fly high(高く飛ぶ)というように、動詞 fly(飛ぶ)を high(高く)が修飾するとき、動詞を修飾する英語の high は副詞ですが、日本語の「高く」は形容詞の連用形です。ここから「日本語の形容詞や形容動詞は連用形になると英語の副詞のように機能する」ということができます。

2

文法用語の対応

英文法と国文法では、文法用語にも微妙な違いが見られます。

英文法と国文法を見比べたとき、本当は同じことを言っているのに名前が違うというものがあります。英語では、名詞を修飾する節を「形容詞節(あるいは関係節)」と呼び、動詞や文を修飾する節を「副詞節」と呼びますが、これと同じ働きをする節を国文法では何と言うでしょう。また、英文法の「仮定法」と同じ働きをする表現方法が国文法にありますが、国文法では何と呼ばれているでしょう。

英語	日本語
形容詞節	A
副詞節	B
仮定法(接続法)	C

答えは、A＝連体修飾部、B＝連用修飾部、C＝反実仮想、となります。AとBの名称が「〇〇修飾部」となっていることに注意してください。そもそも、国文法には「句」や「節」という用語がありません。国文法では、「語」よりも大きな単位を「部」という用語で呼び、英文法でいう「句」と「節」が区別されないのです。ですから、「修飾句」も「修飾節」も国文法では「修飾部」です。

修飾の種類を示す「連体」や「連用」という用語も国文法に特有のもので、「連体」というのは、名詞を修飾する機能のことで、英文法で「形容詞的」と呼ばれるものです。「連体」という名称は、名詞を「体言」といい、その「体言に連なる」ことに由来します。また、「連用」というのは、動詞や形容詞などを修飾する機能のことで、英文法で「副詞的」と呼ばれるものです。「連用」という名称は、動詞や形容詞などのように活用変化する品詞を「用言」と呼び、その「用言に連なる」ことに由来します。したがって、英語の「形容詞句」や「形容詞節」は国文法の「連体修飾部」になり、英語の「副詞句」や「副詞節」は国文法の「連用修飾部」になるわけです。

もう1つ、類似した文法概念に別の用語が与えられている事例として、「事実反することを表す」表現法があります。英語では、これを「仮定法」といいますが、日本語の文語文法では同種の現象を「反実仮想」といいます。英語の授業で仮定法を解説するとき、「古典文法でいう反実仮想にあたります」とコメントしていただければ、2つのものが繋がって見えるようになるでしょう。

3

日本語の「～している」と英語の進行形

日本語の「ている」は、大きく〈進行中〉と〈結果状態〉の2つの意味があります。〈進行中〉の意味は英語では進行形で表わされますが、〈結果状態〉の意味は、英語では進行形ではなく、形容詞や完了形で表わされます。

日本語で「～している」の形で表わされる表現を英語で言おうとすると、機械的に進行形 (be ... ing) で表わそうとすることはないでしょうか。たしかに、日本語の「～している」は、多くの場合、進行形で表わすことが可能ですが、進行形で表わせないものもあります。日本語の「～している」が、どんな意味を表わすかを知り、そのうち進行形で表わせるものと、別の形で表わすべきものを理解しましょう。

日本語の「ている」には大きく2つの意味があります。〈進行中〉と〈結果状態〉です。

- (1) a. 太郎君がグラウンドを走っている。
- b. 花子は何かを考えている。

(1a)の「走っている」は「走る」という行為が行われている最中であることを表しており、同様に、(1b)の「考えている」も「考える」という行為が行われている最中であることを表しています。^{*1}



行為の最中を取り上げるためには、その行為がある程度の長さをもっていなければならないことに注意してください。「走る」という行為は、走り始めてから終わるまで、(その距離にかかわらず)ある程度の時間がかかります。だからこそ、その途中を抜き

*1 文法の説明にあたって、「行為」という言い方は「考える」のような抽象的な事柄にも使っていいことになっています。

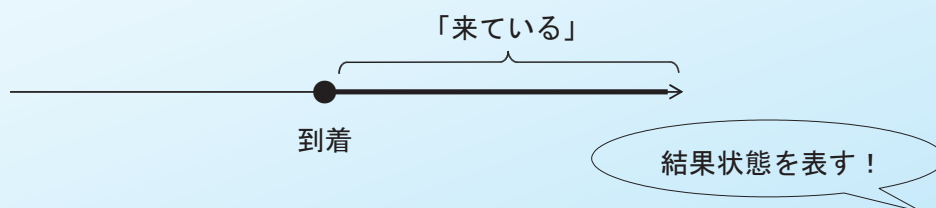
出すように「走っている」ということができるわけですし、「考える」という行為も、考えることを始めてから終えるまで、ある程度の時間がかかるからこそ、その最中を表すことができるわけです。時間的な幅をもつ動詞を活動動詞といいますので、日本語の「活動動詞＋ている」は英語でも進行形で表わすことができるということになります。

「ている」のもう一つの意味は、〈結果状態〉と呼ばれるものです。〈結果状態〉というのは、瞬間的な変化が起こって、その後の状態を表すものです。

- (2) a. 荷物が2つ来ています。
b. 小さな虫が死んでいる。



(2a)の「来ている」が表しているのは、「来る」という出来事の途中ででしょうか。いえ、「来ている」と言えば、目に浮かぶのは「来た後の状態」です。「来ている」が進行の意味にならないのは、「来る」という出来事が、瞬間的な変化だからです。出来事が一瞬で終わってしまうのに、その途中をスローモーションで表すことはできません。このように、瞬間的な変化を表す動詞は「ている」をつけたとき、その変化の後の状態(=結果状態)を表すことになるのです。



同様に、(2b)の「死んでいる」も、実は瞬間的な出来事で、「死ぬ前の状態」から「死んだ後の状態」には一瞬で変わります。ですから、(2b)の「死んでいる」は、死ぬという出来事の途中を表しているのではなく、「死んだ後の状態」を表しています。

それでは、これら2つの「ている」が、英語ではどのように表されるかをみていきましょう。1つ目の「ている」は、英語でも進行形で表されます。

- (3) a. Taro is running in the ground.
b. Hanako is thinking something.

これらは(1)の日本語と同じで、行為の途中を表わしています。気をつけなければならないのは、(2)のように、動詞が瞬間的な意味を表わすときです。日本語では、瞬間的な出来事の動詞を「ている」にすると〈結果状態〉を表わすと言いましたが、英語では、瞬間的な出来事の動詞を進行形(be...ing)にしたとき、〈結果状態〉にはな

りません。英語では、次の(4)のように、これから起きようとする様子(=近接未来)を表わします。

- (4) a. Two parcels are coming soon. (もうすぐ荷物が来るよ.)
b. A small bug is dying. (小さな虫が死にかけているよ.)

(4a)の形が表わしているのは、「来ている」という「来た後」の結果状態ではありません。英語の瞬間動詞 come が進行形 (be...ing) になったときに表わすのは、「いまから来ようとしている状態」、つまり「来る前の状態」です。次のように描くことができます。



瞬間動詞が進行形で使われる最も日常的なケースとしては、例えば、家族の中で「夕飯ですよ！」「いま行きます」というような会話がなされるとき、英語では “Dinner is ready!” “I’m coming.” のように、進行形 (be coming) が使われます。このときの “I’m coming.” が「いまから行きます」の意味であり、「(もう)来ています」ではありません。同様に、(4b)でも、is dying というのは、「死んだ後の状態」ではなく、「死にそうな状態」を表わします。^{*2}

では、日本語の(2)のような表現は、英語で、どう表現すればいいのでしょうか。およそ、(5a)のように完了形か、(5b)のように形容詞で表わされます。

- (5) a. Two parcels have come. (荷物が2つ来ている)
b. A small bug is dead. (小さな虫が死んでいる)

これらの表現で、(2)と同じように結果的な状態が表わされています。

最後に、状態動詞に「ている」がついた場合に触れておきます。「愛している」や「知っている」のような表現は、英語の know や love がすでに状態を表す動詞ですので、そのまま I know ... や I love ... のように進行形にしないで表します。

*2 ちなみに、be dying は「まだ死んでいない」わけですから、小説などという「ダイイングメッセージ(dying message)」は、「まだ死んでいない人が、死ぬ直前に残したメッセージ」ということになります。

4

不規則動詞も特徴を知ると納得できる

動詞には規則動詞と不規則動詞があります。不規則動詞は、活用の手続き(規則)を省いたもので、よく使う動詞ほど不規則動詞になりやすいと言われています。同じことは日本語にも見られます。

英語の動詞に規則動詞と不規則動詞があることはよく知られています。規則動詞は、過去形や過去分詞形をつくる時、動詞の原形に一定の規則を適用すればいいもので、多くの動詞は規則動詞です。

- ① talk → talked / talked
- ② create → created / created
- ③ carry → carried / carried
- ④ drop → dropped / dropped

規則動詞！

その規則には、①語尾に -ed をつけよ、②語尾が e で終わるものは -d をつけよ、③語尾が y のものは y を -ied に変えよ、④短母音+子音で終わるものは子音を重ねて -ed をつけよ、という4つがあります。

これに対して、不規則動詞は、動詞の原形から直接その動詞に特有の過去や過去分詞が作られるものをいいます。

- ⑤ go → went → gone
- ⑥ say → said → said
- ⑦ eat → ate → eaten
- ⑧ see → saw → seen

不規則動詞！

このような不規則動詞は、どうしても、そのまま暗記しなければならず、面倒と感じるかもしれませんが、不規則動詞があることには理由があります。それは、不規則動詞は「よく使う動詞」ということです。規則動詞は、もとの形(原形)に -ed をつけるという点で、操作が簡単であることに間違いはないのですが、不規則動詞は -ed をつけるという操作さえ必要なく、すでに出来上がったものが用意されているわけですから、手取早いというわけです。頻度の低い動詞が不規則動詞にならないのは、使う頻度が高くなければ、変化を覚えられないという事情によるものといっていいいでしょう。

同じことは日本語にもいえます。現代日本語の文法では、動詞の活用に5種類があり、そのうち、カ行変格活用とサ行変格活用が、いわば日本語の不規則動詞です。「変格」というのは「通常の格式(正格)から外れている」ということで、要するに「不規則」ということです。「する」と「来る」が変格活用(不規則変化)になっていることは、この2語の使用頻度が高いことを反映しています。

このような意味での不規則動詞に関して興味深いと思われるのは、尊敬語や謙譲語の中にも不規則動詞が見出されることです。動詞の尊敬語は「お～になる/ご～になる」の形が基本であり、謙譲語は「お～する/ご～する」の形が基本です。多くの動詞は、この規則によって尊敬語や謙譲語の形が作られます。

〈常体〉		〈尊敬語〉		〈謙譲語〉
⑨ 待つ	→	お待ちになる	→	お待ちする
⑩ 報告する	→	ご報告になる	→	ご報告する

これは
規則動詞

これに対し、次のような動詞は、固有の尊敬語や謙譲語をもっています。

〈常体〉		〈尊敬語〉		〈謙譲語〉
⑪ 行く	→	いらっしゃる	→	参る
⑫ 言う	→	おっしゃる	→	申し上げる
⑬ 食べる	→	召し上がる	→	いただく
⑭ 見る	→	ご覧になる	→	拝見する

これこそ
不規則動詞

これらの動詞は、よく使われる動詞で、通常の規則を適応するという手順が飛ばされている点で、まさに英語の不規則動詞と同じ特徴をもっています。

ところで、英語と日本語で共通点に気づいたでしょうか。日本語の「する」や「来る」が不規則動詞(変格活用動詞)であるのと同様に、英語の do や come も不規則動詞ですし、上に挙げた英語の⑤～⑧と、日本語の⑪～⑭を比べると、同じ意味の動詞が不規則動詞になっています。これらは、やはり「よく使う動詞」という特徴を共有しています。一方で、英語と日本語で一致しないところもあります。英語の stand が不規則動詞であるのに、日本語の「立つ」は不規則動詞ではありません。このような言語による違いは、文法のどの側面にもあることで、言語ごとの違いを認めることも、ある意味では異文化理解でもあります。

5

日本語の「が」や「は」はすべてが主語ではない

日本語の格助詞「が」は意味が2つあります。広い意味での〈主体〉と〈対象〉です。〈主体のガ〉は文法的に主語であり、英語でも主語にすることができますが、〈対象のガ〉は英語では主語にならず、むしろ目的語として扱わなければなりません。

日本語の格助詞「が」は意味が2つあります。1つは、広い意味での〈主体〉を表すもので、次の(1)のようなものです。

- (1) a. この人達が私を助けて下さったのです。
 b. 政権が交代した。
 c. 子供が頭を壁にぶつけた。

主体の「が」

これらは「が」の用法として大部分を占めており、基本的には「ガは主体を表す」といっていいほどで、英語では主語で表されます。

- (2) a. These people help me.
 b. The regime has changed.
 c. A child hit his head against the wall.

主体のガは英語でも主語になる

もう1つの「が」は、〈対象〉を表すもので、次のような例が見られます。

- (3) a. あなたにあの建物が見えるでしょう。
 b. 私にも聴衆の喝采がはっきりと聞こえました。
 c. わたしの言葉が分かりますか。
 d. あなたに私の後任が務まりますか。
 e. 我々は本当のことが知りたいのです。
 f. 僕は髪の毛の長い女性が好きです。

対象のガ

このような〈対象〉を表す「が」は、述語が特定の動詞や、形容詞・形容動詞のときに限られます。具体的には、〈知覚〉〈能力〉〈希望〉〈嗜好〉などを表わす述語(動詞・形容詞・形容動詞)にしか見られません。(3)の例でいうと、(3a)と(3b)が知覚文で、

(3c)と(3d)が能力文、(3e)が希望文、(3f)が嗜好(好き嫌い)を表わす文です。必ずしも網羅的ではありませんが、具体的な語を挙げると、「できる」「わかる」「使える」「読める」「話せる」など能力を表す動詞、「見える」「聞こえる」のような知覚動詞、助動詞「～たい」の付いた述語、「好きだ/嫌いだ」のような嗜好に関する形容動詞などがあります。英語との関連で注意しなければならないのは、〈対象〉は英語では主語にならず、むしろ目的語として扱わなければならないことです。(3)の文は、英語では次の(4)のように表されます。

- (4) a. You can see that building over there.
 b. I could hear the audience's applause through the floor.
 c. Do you understand my words?
 d. Are you fit for my successor?
 e. We want to know the truth.
 f. I like a long-hair woman.

対象のガは英語の
目的語になるんだ！

これらの例から分かるように、上の(3)の中で「が」のついていた名詞句は、英語の目的語(動詞の目的語や前置詞の目的語)として現れています。

1つ気をつけて欲しいのは、「が」が「は」に交替した場合です。助詞「は」は、必ずしも主語を表わすわけではありません。正確に言うと、助詞「は」の働きは、格助詞の代わりをすることです。次の例を見てください。

- (5) a. 太郎が生徒会長に選ばれた → 太郎は生徒会長に選ばれた
 b. この問題が解けません → この問題は解けません
 c. 要らないものを捨てなさい → 要らないものは捨てなさい
 d. 太郎に特別賞が授与された → 太郎は特別賞が授与された
 e. 自宅から学校まで5分くらいだ → 自宅は学校まで5分くらいだ

左側の文で「が」「を」「に」などで標示されていたものが、矢印の右側ではすべて「は」になっています。「は」は、格助詞の代わりをするものですから、逆に言うと、右側の「は」は、左側のように「が」や「を」に戻すことができます。日本語の「は」で表わされるものは、英語でも必ず主語になるというわけではなく、格助詞に戻したとき、(5a)のように〈主体のガ〉であれば英語の主語になりますし、(5b)のように〈対象のガ〉であれば英語の目的語になります。また、(5c)や(5d)のように間接目的語や前置詞で表わされることもありますので、注意が必要です。

6

英語の助動詞と日本語の助動詞

英語と日本語では、助動詞が接続する語に違いがあり、助動詞が接続する語の形にも違いがあります。いずれの点も、日本語に比べ、英語の助動詞は使い方が単純です。

英語の助動詞は、中学１年から学習しますが、その使い方は比較的単純です。英語の助動詞の基本的なポイントは、次の３つです。

英語の助動詞

- ①英語の助動詞は、平叙文では動詞 (be動詞を含む) の前に置いて、動詞の意味を補う。
- ②その動詞 (be動詞を含む) は常に原形をつかう。
- ③助動詞を２つ以上続けて使うことはできない。

英語の助動詞は単純だ！

これに比べて、日本語の助動詞は、実は複雑な特徴を持っています。

日本語の助動詞

- ①日本語の助動詞は、動詞の後ろに置かれるが、動詞のほかに、形容詞・形容動詞・名詞にも接続する。
- ②その動詞・形容詞・形容動詞は、助動詞に応じて形を変えなければならない(活用しなければならない)。
- ③助動詞を２つ以上続けて使うことができる。

これら３つの点を比べると、英語の方がはるかに単純であることがわかります。

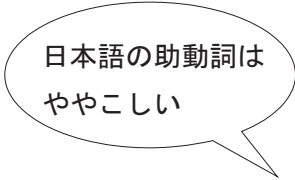
まず、１点目として、日本語の助動詞が接続するのは動詞に限りません。

- | | |
|--------------------------------|------------|
| (1) a. 太郎は１人でスイカを <u>食べた</u> 。 | [動詞＋助動詞] |
| b. 太郎のスイカは <u>大きかった</u> 。 | [形容詞＋助動詞] |
| c. 太郎の食べ方は <u>豪快だった</u> 。 | [形容動詞＋助動詞] |
| d. 太郎のスイカは <u>熊本産だった</u> 。 | [名詞＋助動詞] |
| e. 太郎は一切れも残さ <u>なかつた</u> 。 | [助動詞＋助動詞] |

助動詞「た」が接続している語を見ると、(1a)から(1e)の順に、動詞「食べる」、形容詞「大きい」、形容動詞「豪快だ」、名詞「熊本産」、助動詞「ない」となっており、英語の助動詞が動詞にしか接続しないのと大きく違います。

2点目に、助動詞が接続する動詞・形容詞・形容動詞の方も、助動詞に応じて形を変えなければなりません(活用しなければなりません)。

- (2) a. 太郎は手紙を書かない。 [未然形]
- b. 太郎は手紙を書きます。 [連用形]
- c. 太郎は手紙を書くそうだ。 [終止形]
- d. 太郎は手紙を書きそうだ。 [連用形]



日本語の助動詞は
ややこしい

(2)の例では、「書く」という動詞にいろいろな助動詞が接続していますが、その助動詞に応じて活用形を変えています。(2a)のように「ない」という〈打ち消し〉の助動詞が接続するときは未然形になっていますし、(2b)のように「ます」という〈丁寧〉の助動詞が接続するときは連用形になります。注意すべき例として、(2c)と(2d)は、同じ「そうだ」という助動詞が接続していますが、(2c)のように、〈伝聞〉の意味では「書く」という終止形になり、(2d)のように〈様態〉の意味では「書き」という連用形にならなければなりません。

3点目に、日本語の助動詞は、2つ以上続けて使うことができます。

- (3) a. 花子は本当は図書委員になりたかった。
- b. 遅刻は絶対に許されないようです。

(3a)には文末に助動詞が2つ続いています。「たかっ」と「た」です。このうち「たかっ」は〈希望〉を表わす「たい」の未然形で、「た」は〈完了〉の助動詞と言われます。(3b)には「れ」「ない」「よう」「です」の4つもの助動詞が続いています。「れ」は〈受け身〉の助動詞「れる」の未然形、「ない」は〈打ち消し〉の助動詞「ない」の終止形、「よう」は〈推定〉の助動詞「ようだ」の連用形、「です」は〈丁寧〉の助動詞の終止形です。ちなみに、助動詞「ない」の意味は〈打ち消し〉といい、〈否定〉とは言いません。

このように、日本語の助動詞が接続において複雑であるのに比べれば、英語の助動詞は極めて単純であり、日本語の助動詞を使っている人なら英語の助動詞は全然難しくない、といってもいいでしょう。

7

複文の順序

英語は、主節と副詞節の順序を入れ替えることができ、ニュアンスの違いを出すことができます。同じことは、日本語にもいえます。主節と副詞節の順序を入れ替えることで、自分の気持ちに近い内容を表現できます。

英文法では、主節と従属節からなる文を複文と言います。その従属節が副詞節のとき、次の(1a)のように〈主節＋副詞節〉の順番が普通ですが、(1b)のように〈副詞節＋主節〉の順番にすることも可能です。

- (1) a. When I was six years old, I moved to Kobe with my family.
b. I moved to Kobe with my family when I was six years old.

同じ意味かな？

(1a)も(1b)も、実は微妙に意味合いが異なりますが、内容的には同一ですから、中学校や高校では、どちらも「私は6歳のとき家族で神戸に引っ越した」のように同じ日本語に訳すことが多いようです。

一方、日本語でも、主節と従属節(副詞節)の前後関係を変更することができます。次の例をみてください。

- (2) a. 私が6歳になったとき、家族で神戸に引っ越した.
b. 家族で神戸に引っ越したのは、私が6歳になったときだった.



この2つは、全く同じ意味でしょうか。(1)のように英語で見たときは違いが分かりにくかったかもしれませんが、(2)のように日本語で比べると、ニュアンスに違いがあることに気づくのではないのでしょうか。(2)の文には「私が6歳になった」と「家族で神戸に引っ越した」という2つの出来事(節)が含まれますが、(2a)では、どちらかという「家族で神戸に引っ越した」の方にウエイトがあり、(2b)では「私が6歳になった(とき)」の方にウエイトが置かれているように解釈できると思います。このように、2つの節(主節と副詞節)が並んでいるときは、基本的に、後ろに置かれた方の節に意味的な重み(ウエイト)があるということが知られています。

同様のことは、次のペアにも言えます。

- (3) a. 我々は、貴方を信じていたから、ここまで付いて来たんです.
b. 我々がここまで付いてきたのは貴方を信じていたからです.

後ろが重い！

(3a)は〈従属節＋主節〉の順になっていますので、後ろにある主節「ここまで付いて来た」にウエイトが置かれるのに対し、(3b)は〈主節＋従属節〉の順になっていますので、後ろにある従属節「貴方を信じていた(から)」が相対的に強調されます。

このことは、英語で表わしたときにも有効です。

- (4) a. Because we believe in you, we have followed you so far.
b. We have followed you so far (just) because we believe in you.

後ろが重い！

(4a)のように、〈従属節＋主節〉の順に並んでいるときは、主節“we have followed you so far”にウエイトが置かれ、(4b)のように、〈主節＋従属節〉の順に並べられたときは、従属節“because we believe in you”の方が相対的に強調されます。だからこそ、(4b)では、従属節の直前に副詞 just を付けて、より強調することが可能なのです。ですから、2つの節のうち「ここまで付いて来た(we have followed you so far)」という主節の方が重要ならば、(4a)のように通常の順序で書けばいいのですが、もし、主節よりも従属節(=「貴方を信じていたから(because we believe in you)」という理由)の方を強調したいなら、(4b)のように従属節を後ろに置くことになります。

この違いは、文脈の中で考えると一層はっきりすると思います。例えば、Aさん(部下)とBさん(上司)の会話の中で、Aさんが必死にBさんを励ましているとし、AさんがBさんに、Please, don't give up. You are our boss! (諦めないでくださいよ。あなたは私たちの上司でしょう！)と言った後に(4)の内容を伝えるとしたら、(4a)と(4b)では、どちらに説得力があるでしょう。やはり、(4a)よりも(4b)の方が自然です。この文脈では「貴方を信じていたから(because we believe in you)」という理由の部分(従属節の内容)を強調したいわけで、(4a)より(4b)の方が自然なのは、その従属節が後ろに置かれているからです。

このように、主節と副詞節の前後関係には、基本的に「後ろの節にウエイトが置かれる」という原則がありますので、英語を書くとき(あるいは英語を話すとき)、自分が言いたい内容に応じて使い分けることが可能です。また、(1)や(4)に見られる違いは、基本的に日本語の(2)や(3)の違いと同じですから、(1)や(4)は、(2)や(3)のように訳し分けると、文脈の中で自然な日本語になります。

8

日本語には受動文が2種類ある

日本語の受動文には、直接受動文と間接受動文の2種類あります。重要なのは、直接受動文は英訳できるのに、間接受動文はそのまま英訳できないことです。日本の間接受動文を英語で表すときは、やや複雑な構文を使う必要があります。

受動文という構文は、英語にもありますし、日本語にもあります。英語の受動文も、日本語の受動文も同じような操作によって作られますが、日本語には2種類の受動文があり、そのうちの1つは英語で表現できますが、もう1つは英語にならないことが知られています。

英語の受動文を指導するとき、一般に3つの操作(ルール)が示されます。

- ① 目的語を主語に移動し、
- ② 述語を〈be＋過去分詞〉の形にし、
- ③ 元の主語を by の目的語に移動する

これによって、例えば、Everyone loves Mary. という能動文から Mary is loved by everyone. という受動文が作られます。

一方、日本語の受動文にもルールがあります。

- ① 「を」や「に」等のついた成分を主語(ガ格)に昇格させ、
- ② 述語動詞に助動詞「(ら)れる」をつけ、
- ③ もとの主語(ガ)を「に」または「によって」に降格する

国文法には「目的語」という概念が設定されていないので、単純に「主語と目的語を入れ替える」というような言い方はできません。このため、名詞に付ける格助詞をそのまま使って「『を』のついた名詞」や「『に』のついた名詞」などといいます。具体的な例として、次の(1a)の能動文から(1b)の受動文を作るにあたって「ヲ格」が主語に格上げされています。

- (1) a. 太郎が花子を殺した。
b. 花子が太郎に殺された。 [ヲ格からの格上げ]

この例では、能動文(1a)で「ガ格」だった「太郎」が「二格」になり、代わりに、「ヲ格」だった「花子」が主語(ガ格)に格上げされています。

日本語の受動文で特徴的なのは、「ヲ格」の目的語だけでなく「二格」や「カラ格」からも受動化ができるという点です。

- (2) a. 太郎が警官に道を尋ねた。
b. 警官が太郎に道を尋ねられた。 [二格からの格上げ]
- (3) a. 太郎が花子から財布を盗んだ。
b. 花子が太郎に財布を盗まれた。 [カラ格からの格上げ]

これらの(2)および(3)では、「ガ格」だった「太郎」が「二格」になる代わりに、それぞれ「二格」の「警官」と「カラ格」の「花子」が主語に昇格しています。

また、次のように「ノ格」が主語になるような受動文も成立します。

- (4) a. 太郎の妻が逃げた。
b. 太郎が妻に逃げられた。 [ノ格からの格上げ]



少し分かりにくいかもしれませんが、能動文で「ガ格」だった「妻」が受動文で「二格」になり、その代わり、能動文で「ノ格」だった「太郎」が受動文で主語(ガ格)になっています。

上述の内容から、受動化によって主語に昇格する成分は次のように整理できます。

ヲ格成分 > 二格成分 > カラ格成分 > ノ格成分

この序列は、日本語で受動化しやすい格成分を左から並べたものです。日本語学では、(1)や(2)のように、「ヲ格」や「二格」が主語になる受動文を「直接受動文」といい、(3)～(4)のように、「カラ格」や「ノ格」を主語に昇格させるような受動文を「間接受動文」と呼んでいます。重要なことは、間接受け身文を英語にすると通常の方法で受動化できないという点です。実際、間接受け身文を英語で表すには、次のように、have を使った特殊な構文が必要になります。

- (5) a. Taro had his wallet stolen by someone.
b. Taro had his wife run away.

日本語の間接受け身文は、基本的に、(5a)のような〈have＋目的語＋過去分詞〉のパターンで作られますが、(5b)のように動詞が自動詞のときは、〈have＋目的語＋原形〉になります。このとき、(5b)の run は過去分詞ではなく、原形であることに留意してください。

さらに、間接受け身文について補足すると、日本語には次のような受動文もあります。

- (6) a. 太郎が雨に降られた。
b. 太郎が赤ちゃんに泣かれた。



こうした受動文に、あえて能動文を与えれば、次のような能動文が対応します。

- (6) a' 雨が太郎のところに降った。
b' 太郎のせいで赤ちゃんが泣いた。



これらの例は日本語研究者の間でも議論の多いところですが、能動文に「ところ」や「せい」のような形式名詞が含まれていて、受動化にあたって、主語の「雨」や「赤ちゃん」が「二格」になり、その代わり「太郎」から形式名詞が外れて主語になっています。このような間接受動文は日本語に特徴的なもので、もちろん英語などにはない構文です。日本語の表現が必ずしも同じように英語で表わされるわけでないことは、もうお分かりでしょうが、間接受動文は、その典型的なものなのです。

9

一人称代名詞の特殊な用法

英語の一人称複数の代名詞には2つの用法があります。「相手を含む用法」と「相手を含まない用法」です。同じ使い分けは実は日本語にも見られます。

高校レベルでは、Let's ... と Let us ... では微妙に意味が違うことが指導されます。短縮形の Let's ... は「私(たち)と一緒に貴方も～しましょう」という意味ですから、意味上の主語 us に相手(2人称)が含まれます。これに対し、短縮しないで Let us ... といったときは「私たちに～させてください」という意味で、私たちだけで何かをするのであって、意味上の主語 us に相手(2人称)は含まれません。

Let's	=私(たち)と一緒に～しましょう	→	us は相手を含む
Let us	=私たちに～させてください	→	us は相手を含まない

このように、英語の一人称複数には「相手(2人称)を含む一人称複数」と「相手(2人称)を含まない一人称複数」があるのですが、この区別は日本語にも見られます。具体的に、どんな表現かわかりますか。

相手(2人称)を含む一人称複数	→	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px 10px;">A</div>
相手(2人称)を含まない一人称複数	→	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px 10px;">B</div>

Aは簡単で、答えは「私たち」です。普通に「私たち」と言えば「相手を含む1人称」です(もちろん「私たち」が相手を含まないこともあります、相手を排除するわけではありません)。むしろ、気づきにくいのはBの「(決して)相手を含まない一人称複数」で、日本語では「私ども」という表現が該当します。

この表現を取り上げたのは、一般社会では、「私たち」に対する「私ども」という言い方(自称詞)が日本語の(ビジネス)マナーとして定着しており、卒業後、社会人となったときには身につけなければならないものだからです。その意味で、この「私ども」という1人称複数代名詞は、国語科での学習という狭い枠を越えて、一般社会で生きていくための極めて実践的な学習であり、これを英語の Let us と Let's における1人称代名詞の意味的な差異に関する学習の延長線上に指導し、その上で、再び英語における Let us と Let's の差異とリンクさせることで、英語と日本語の連携を強化することができるのではないのでしょうか。

10

英語と古典(その1)ー仮定法と反実仮想

英語の仮定法に相当する文法現象として、日本語の古典に「反実仮想」という構文があります。英語の仮定法では現在の事実と反することを仮定するとき助動詞の過去を用いますが、古典の反実仮想でも過去を表す助動詞が用いられます。

類似した文法概念に別の用語が与えられている事例に、「事実と反することを表す」表現法があります。英語では、これを「仮定法」というのに対し、日本語の文語文法(古典文法)では同種の現象を「反実仮想」と呼んでいます。用語法の差異はあるものの、内実には目を向けると、両者には共通点も見られます。

まず、英語の仮定法で最も基本的なことは、実際の時間と動詞の時制にズレがあるということです。現在のことをいうのに過去形を使い、過去のことをいうのに過去完了形を使うというように、事柄の時間と動詞の時制が1つずれることを習ったと思います。次の例を見てください。

- (1) If I was in your position, I would not agree with the proposal.
(もし私があなたの立場だったら、提案に賛成しないだろう)

- (2) If it had rained yesterday, we would have stayed at home.
(昨日もし雨が降っていたら、家にいただろう。)



(1)は、述語が過去形(was/would)になっているものの、全体としては現在の話をしており、「いま私はあなたの立場にないから提案に賛成する」という意味が含意されます。(2)では、述語が過去完了形(had rained/would have stayed)になっているものの、全体としては過去の話をしており、「昨日は雨が降らなかったから家にいなかった」という意味が含意されています。

この現象の解釈として、「仮定法はウソをいうこと」と考えることもできます。「この発話が現実の逆である」ということを明示的にアピールするために、述語の時制を変えて表しているわけです。いわば、時制についても「ウソ」をいうことで、この内容がウソであることを良心的に示していると考えてもいいでしょう。もし、仮定法に「内容がウソであることを示す標識」がなかったら、コミュニケーションは大変なことになるからです。

もう1つ、次の例を見てください。

- (3) If it were not for cherry blossoms in the world,
our heart in spring could be so peaceful

(3)は、「もしこの世界に桜の花がなかったら、春、私たちの心は穏やかであろうに」という現在の事柄に関する仮定表現ですが、述語の時制は過去になっています。実は、このような「現在の事実と反する仮定を表すのに過去の助動詞が発動される」という原理は、英語だけでなく、ドイツ語や他の言語にもあることが知られています。

ここで興味深いと思われるのは、古代日本語(古典語)でも、英語の仮定法過去と同じような現象が観察されることです。次の例を見てください。



- (4) 世の中に絶えて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし

(4)が(1)や(3)と同じ現象というのは、下線部の助動詞のことです。(4)も内容的に「現在」のことを表していますが、条件節の中の下線部「せ」は、言うまでもなく、過去の助動詞「き」の未然形です。現在の事実と反する仮定を表すのに過去の助動詞が使われている点で、英語の仮定法過去と同じとみることができます。

英語の「仮定法」も古典の「反実仮想」も、事実と反することを仮定するという点で本質的に同じ現象です。それを、英文法と古典文法で別の呼び方をしていることも、実は問題だと思っていますが、それはともかく、ここで重要なのは、英語の仮定法で現在の事実と反することをいうのに過去形を使い、古典の反実仮想でも現在の事実と反することをいうのに過去の助動詞を使うという点です。

専門的に言うと、英語の仮定法と古典の反実仮想の両方で過去の表現が用いられるのは、実は偶然ではなく、然るべき理由があります。その理由は、少し難しくなりますので詳しい説明は省略しますが、古典日本語と現代英語の間に、時間と空間を超えた共通点が見られることは、大きな驚きではないでしょうか。^{*3}



*3 過去時制が非現実を表わす理由について、過去というのは現在と時間的に離れたところの話をするものなので、その意味から、現実(実際の事柄)と離れた内容を表わすようになった、という最近の研究があります。

11

英語と古典(その2)一母音の音声変化

英語では au と綴れば長母音の [ɔ:] と発音しますが、日本語の古典でも au という二重母音は音声レベルで [ɔ:] と発音されます。英語と古典は、国も時代も違うのに音声面でも意外な共通点が見られるのです。

古典日本語の特徴の1つに、ひらがなの使い方が現代日本語と違うという点が挙げられます。ひらがなの使い方を「仮名遣い」と言いますが、古典日本語の仮名遣いを「歴史的仮名遣い」といい、いま私たちが使っている仮名遣いを「現代仮名遣い」といいます。歴史的仮名遣いでは、母音の読み方にも特殊な規則があります。それは、「ア・イ・エの後ろにウが続くと特殊な長音になる」というものです。

au	→	ɔ:	《例》	まうす (mausu)	→	mɔ: su (申す)
iu	→	yu	《例》	いうそく (iusoku)	→	yusoku (有職)
eu	→	yo	《例》	ばせう (baseu)	→	basyo (芭蕉)



簡単に言いますと、「ア」の後に「ウ」が続くと「オー」という音になり、「イ」の後に「ウ」が続くと「ユー」という音になり、「エ」の後に「ウ」が続くと「ヨー」という音になります。この規則は、次のような語に見られます。まず、「ア」の後に「ウ」が続いて「オー(ɔ:)」になるパターンとして、歴史的仮名遣いで「まうす(mausu)」と書く動詞があります。^{*4} このなかに「アウ(au)」という繋がりが見られます。この「アウ」が「オー」になりますので、全体として「もーす」になります。これによって「申す」という動詞になるわけです。次に、「イ」の後に「ウ」が続いて「ユー」になるパターンとして、「いうそく(iusoku)」という名詞があります。この中の「イウ」の部分が「ユー」になって、「ゆうそく」になります。これが「有職」という名詞になるわけです。3つ目に、「エ」の後に「ウ」が続いて「ヨー」になるパターンとして「ばせう(baseu)」という名詞があります。この中の末尾に「エウ」という部分がありますが、ここが「ヨー」になりますので、全体として「ばしょう」となり、これが「芭蕉の花」の「芭蕉」あるいは「松尾芭蕉」の「芭蕉」になるわけです。

*4 長母音 [ɔ:] は、江戸時代に [o:] に変化し、現在でも [o:] という音で発音されていますが、[ɔ] と [o] は舌の位置が4分の1ほど高いかどうかの違いですので、ここでは日本語の音も [ɔ:] と表記することにします。

ここで面白いと思うのは、実は、同じような現象が英語にも見られることです。

au	→	ɔ:	《例》	<u>a</u> uction(競売)	lau <u>nd</u> ry(洗濯場)
ou	→	au	《例》	lou <u>d</u> (大声の)	mount <u>ai</u> n(山)
oa	→	ou	《例》	bo <u>a</u> t(小船)	fl <u>oa</u> t(浮く)

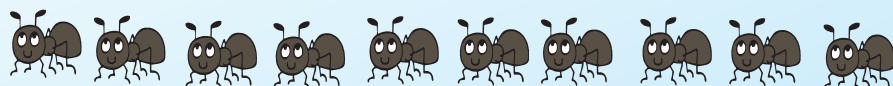


英語では、母音が au, ou, oa という繋がり方をしたとき、特殊な二重母音になったり長母音になったりします。au という組み合わせは[ɔ:]という長母音になり、ou という組み合わせは[au]という二重母音になり、oa という組み合わせは[ou]という二重母音になるというものです。

具体的な例を見てみましょう。1つ目の au という組み合わせが[ɔ:]という長母音になるパターンとして、auction(競売)や laundry(洗濯場)のほか、sauce(調味料のソース)や faucet(蛇口)などがあります。2つ目の ou という組み合わせが[au]という二重母音になるパターンとして、loud(大声の)や mountain(山)のほか、bound(跳ね返る)や sound(音)などがあります。3つ目の oa という組み合わせが[ou]という二重母音になるパターンとして、boat(小船)や float(浮く)のほか、goat(ヤギ)や coat(上着/塗装)などがあります。

ここで、英語と古典で同じ現象が起きていることに気づかれませんか。先ほど、古典では「ア」の後に「ウ」が続くと「オー(ɔ:)」になると説明しました。英語でも、au という綴りが[ɔ:]という長母音になりますので、古典でも英語でも au という綴りが[ɔ:]という長母音になる点で同じ変化が起きていることになります。このように、古典日本語と現代英語で、時間と空間を超えて共通の現象が見られるということは1つの驚きではないでしょうか。

この変化は、身近なところにも観察されます。「ありがとう」という表現は、形容詞「ありがたし(有り難し)」に由来し、その連用形「ありがたく(arigataku)」の「く(ku)」がウ音便化して「ありがたう(arigatau)」となり、語末の「あう(au)」が「おう(ɔ:)」になって出来たのが「ありがとう」です。^{*5} 同様のことは、「全うする」という動詞にも見られます。「まっとうする」は、形容詞の連用形「まったく(mattaku)」に「する」がついた形で、子音kが脱落(ウ音便化)して「まったうする(mattausuru)」となり、そこに au → ɔ: の変化が加わって「まっとうする(matto:suru)」になった語です。



*5 発音上は「ありがとー」でも、表記は「ありがとう」となります。

さらに言えば、関西方言で「買う」や「会う」に完了の助動詞「た」がつくとき、終止形のまま「かうた(kauta)」や「あうた(auta)」となり、これが「こーた」「おーた」となるところに au → ɔ: の変化が見られます。その意味で、英語の auction や Australia などの au を [ɔ:] で発音することにおいては、関西の方には有利かも知れません(笑)。

補足です。英語では、原則として oa は [ou] と発音されますが、oa と綴って長母音の [ɔ:] と発音する例は 2 つしかありません。その例は、broad [bro:d] と abroad [əbro:d] です。正確に言えば、ここから派生する broadcast (放送) や broadcaster (放送する人) などの派生語が若干ありますが、派生語ですから覚えるまでもないでしょう。いずれにしても、入試では、こういう例外的な語が発音問題に出題されますので覚えておくとうまくいけるかもしれません。ついでに、ou と au にも若干の例外があります。ou を [au] と読まないのには、soul [soul] や shoulder [ˈʃouldər] のように、そのまま [ou] で発音されるものと、trouble [trʌbl] や touch [tʌʃ] のように、短い [ʌ] になるものがありますが、ごく少数です。また、au を [ɔ:] と読まないものとしては、laugh [lɑ:f] や aunt [ænt/a:nt] のように、長母音の [ɑ:] や短母音の [æ] になるものもありますが、これも少数です。^{*6}

*6 さらに話が脱線しますが、俗に「料理のさしすせそ」というときの「せ」は「醤油」を指します。なぜ「しょうゆ」なのに「せ」になるのかは、歴史的仮名遣いの「せう」が「しょう」になるというルールを聞けばお分かりになることでしょう。ちなみに、「さしすせそ」のうち、ほかの 4 つは何かというと、「さとう(砂糖)」「しお(塩)」「す(酢)」「みそ(味噌)」ということになっています。これが料理で重要な調味料だそうです。

12

動詞の「重さ」の違い

英語では、一つの節(clause)に何度も動詞が出てくると不自然になりますが、日本語は一つの文に動詞が何度か出てきても不自然ではありませんので、英語の形容詞や前置詞句を日本語の動詞で訳出すると自然な日本語になることがあります。

いよいよ最後のトピックです。この話は具体的な例がないと分かりにくいかもしれませんが、次の英文を見て下さい。

(1) They were the first successful developers of these mines.

この英文を逐語的(直訳的)に和訳すると、次のような日本語が標準的でしょうか。

(2) (彼らは)これらの鉱山の最初の成功裏の開発者たちであった。

この日本文は、もとの英文に忠実ではあるものの、日本語として決して自然ではありません。より日本語として自然な表現にするなら、次のような感じになるでしょうか。

(2') (彼らは)このあたりの鉱山を開発して最初に成功した人たちであった。

これで、随分と自然な日本語になったと思いますが、(2')の日本語と(1)の英語を比べると、もとの英文の中に動詞は were しかなかったのに、(3)の日本語には文末の述語「であった」のほかに「開発して」と「成功した」という2つの動詞が含まれています。このうち、「開発して」の意味はもとの英文で developers という名詞に含まれる意味成分で、「成功した」の意味はもとの英文で successful という形容詞の中に含まれる意味成分です。いずれも、英文では名詞や形容詞で表されていた部分が、日本語では動詞を使って表現されていることがわかんと思います。このように、(1)の英文に develop や succeed という動詞が使われていないのは、実は、英語では、1つの文に動詞を何度も使ってしまうと、英語として不自然になるという事情があるからです。実際、(2')の日本語を逆に英訳してみると、They developed these mines and succeeded for the first time. のようになりますが、これは英語として——(2)の日本語が不自然なのと同じくらい——違和感のある文となってしまいます。

このように、英語において、定動詞(finite verb)の連続を嫌うという傾向が、おそらく準動詞の発達を促したものと思われます。この結果として、英語では準動詞といわれる不定詞句や分詞句が発達しているわけです。

- (3) a. I woke up one morning to find myself famous.
b. ある朝起きたら有名になっていた。



(3a)の英文では、woke と find という2つの動詞が含まれますが、find は準動詞(不定詞)になっていますので、定動詞は woke の1つだけです。これに対応する日本語の(3b)には「起きる」と「になっていた」という2つの定動詞が含まれていますが、何ら不自然ではありません。

また、次のように、英語の前置詞句が動詞で訳出されることもあります。

- (4) a. John broke the vase into pieces.
b. 花瓶を割ってバラバラにした。



(4a)の中の前置詞句 into pieces は、(4b)の日本語の中で「バラバラにした」という動詞句になっています。このほか、日本語の動詞表現が英語の前置詞句で表される例として、come on foot(歩いて帰る)や a girl in red(赤い服を着た少女)のような表現があります。日本語で「歩いて帰る」の「歩いて」は on foot という前置詞句で表されますし、「赤い服を着た」は in red という前置詞句で表されます。ここで、英語で表現するという観点から要点を整理すると、日本語で「歩いて」や「(赤い服を)着た」のように動詞で表すからといって、それを英語でも動詞で表して良いとは限らないということです。もちろん、日本語で「徒歩で」と書いてあれば、on foot という熟語が思い浮かびやすいでしょうが、「歩いて(帰る)」のような日本語になっているときは注意が必要です。繰り返しになりますが、日本語では、動詞を連続して使っても不自然にはなりませんが、日本語を英語に訳すとき、複数の動詞を並列的に並べると英語として不自然な文になってしまう可能性があります。^{*7}

*7 もちろん、本当に出来事が並列的に連続したときは動詞を並列的に連続して使うことは差し支えありません。例えば、ビートルズの歌(A day in the life)のように、Woke up, got out of bed, dragged a comb across my head. (起きて、ベッドから出て、髪を櫛でといた)のような表現は全く自然な英語です。逆に言うと、「歩いて帰る」のような表現は、「歩く」と「帰る」ことは並列的な関係にはないことを理解しなければなりません。

では、練習してみましょう。次の(5)の英文を、日本語にしてみてください。

- (5) a. From my standpoint, something invisible is often more important than something visible.
b. Nobody noticed my absence from the meeting.

もちろん、いくつかの訳文があり得るでしょうが、1つの解答例として次のような日本語にすることができます。

- (6) a. 私の立場から言うと、目に見えるものより目に見えないものの方が大切なことが多い。
b. だれも私が会議を欠席したことに気づかなかった。

(5a)の文頭にある From my standpoint の部分に動詞は含まれていませんが、日本語では(6a)のように「言う」とつけた方が座りが良く、invisible や visible は英語としては形容詞ですが、日本語では「目に見えない(もの)」や「目に見える(もの)」のように動詞を含んだ表現になります。なお、副詞の often は、もちろん「しばしば」という表現が直接的で分かりやすいのですが、(6a)のように「～ことが多い」のように形容詞を述語として使うと自然な日本語になることがあります。ということは、逆に言うと、日本語で「～ことが多い」のように表される内容は、英語にするとき、副詞 often や in many cases のようなフレーズを使うと自然に表現できるということでもあります。また、(5b)については、my absence from the meeting の部分が難しいかもしれません。この部分で、absence(欠席/不在)という名詞の後ろに from という前置詞が来ているのは、形容詞の absent が absent from the meeting (会議を欠席する)のように前置詞 from を伴って使われるのを引き継いだためです。そうすると absent from the meeting は「会議の欠席」という意味になり、my は absence の意味上の主語ですから、全体として、「私が会議を欠席したこと」というように動詞を含んだ表現にすると自然な日本語になります。繰り返しになりますが、英文解釈のとき、英文の中に動詞が含まれていなくても、日本語では動詞に変えて解釈すると自然な日本語になることがあり、逆に、日本語では動詞で表されている部分も、英語では名詞や形容詞あるいは副詞で表すと自然になることがあるのです。

このように、1つの文の中に複数の動詞が含まれると英語では不自然になるのに対し日本語では不自然にならないということは、英語に比べて日本語の動詞は文の中で「それほど重くない」ということもできます。英語と日本語では動詞の「重さ」に違いがあると考え、同じ内容だからといって同じように動詞が使われるわけではない理由も分かるのではないのでしょうか。

おわりに

本冊子は、英語科の教員に、日本語に関する情報と知識を提供するために作成されたものですが、国語科の教員にフィードバックされる内容をも含んでいます。例えば、本冊子の[5]で、「が」や「は」の話を取り上げました。中学校3年生で、日本語の「主語」を指導するとき、主体の「が」や「は」は主語であるのに、対象の「が」は主語ではないという指導は現に行われていると思いますが、このことと関連させて、主体の「が」や「は」は英語でも主語になるのに対し、対象の「が」は英語の目的語になるというような指導は、中級レベル以上の生徒に対して有効かと思われます。このほか、[3]に挙げた「～している」の話は、日本語の表現形式に関する理解を深めることになるでしょうし、[4]に挙げた不規則動詞に関しては、変格活用や敬語の学習において、不規則の理由を知ることで理解(記憶)が楽になるということはないでしょうか。ともあれ、難しいと思われるところはパスしながら、目の前にいる生徒の実情に応じて、面白そうと思うトピックをネタとして教室で利用して頂ければ、本冊子作成の目標は達成されたものと思っております。

この冊子の内容は、今後も不断のブラッシュアップを重ねていく必要があり、その意味では未完成と言わなければなりません。取り上げる項目の精査と拡張を図るとともに、次の課題としては小学校における英語教育(外国語活動)と国語科の内容面での連携を促進することも視野に入れています。これを読まれた方から忌憚のないご意見とご叱正を頂戴できれば幸いです。また、本冊子の内容および学術的根拠などに関する問い合わせも遠慮なくお寄せ下さい。

菅 井 三 実

英語学習を通して知る日本語のツボ

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

兵庫教育大学 社会・言語教育学系 菅井研究室

TEL/FAX: 0795-44-2080

MAIL: ksugai@hyogo-u.ac.jp

2009年12月10日発行

